

武者小路実篤の「自己と他人」論と 魯迅の「犠牲論」における一考察

楊 英 華

実篤と魯迅は、ほぼ同時期に活躍した文化人である。人道主義、啓蒙主義という大きな枠組から見た場合、共通点の多い文学者でもある。両者は、理想社会の創造に向けて作品にとりくみ、社会活動にも積極的に参加し民衆と深い結びつきをつくった。これは、当時の様々な思想家や啓蒙家に比べて大きな特徴であろう。本稿では、実篤の「自己と他人」論と魯迅の「犠牲論」の考察を通して小説家、思想家としての作者をより正確に解明することを主眼としている。

一 武者小路実篤の「自己と他人」論

実篤は、若い頃から人生観に関わる「自己と他人」について哲学的な関心を持ち、繰り返し論じていた。その関心の強さは、数多い雑感文において「自己と他人」の関係を論じていることから、彼の際だった特徴になっている。この若い時期に関心を持った人生観は、それ以降の作者の小説、戯曲、絵画で着実に深められ、人生経験の積み重ねにしたがって定着していった。

「自己と他人」との関係について、最も早い時期に論じたのは、『荒野』に収められた「人生に就て」(1908)である。

要するに愛なるものは自己と他人との間の垣をとるものである。他人の幸福を自己の幸福の如くに喜ぶことである、自己が他人と合一することである(全集1巻, 62頁)。

この文章からは、作者が「自己と他人」とは愛によって合一すべきものであると考えていることが窺える。当時23歳であった作者が、文学に専念する目的で東京帝国大学を中退し、雑感文、短編小説、詩などを編集した『荒野』を自費出版した背景には、積極的に人生に取り組もうとするなみなみならない決意と創作に対する姿勢が見える。彼は、この時点からすでに「自己」は「他人」と合一すべきであると考えていた。しかしこの段階で本人は、哲学的で難解な関係に対する問題意識が、その後の思想的な原点になることや、生涯を通じ何度か変転することも含め知るよしもなかった。

その後、実篤の「自己と他人」についての論述は、評論や雑感文および小説、戯曲などに著しく増えていく。それでは、彼はなぜこの深遠で解明困難というべき問題に注目するようになったのであろうか。華族出身で、衣・食・住に困ることなく、教養の蓄積という条件にも恵まれた環境に育った実篤が、「他人」に積極的に関心を持ち、その関わりを探求した理由は何で

あったのか。その理由は、ほぼ事実即して書かれた自伝小説、『或る男』（新潮社 1923・11）に詳しい。彼の思想形成にとって出発点とも言える出来事が、大きな影響を与えている。それは、最後は財産と特権を投げ捨てて放浪するものの人間の内面生活を描き、生涯を通して思想的探求を続けたトルストイと、劇作家として神秘的な象徴劇で幸福とは何かを問い続けたメーテルリンクとの文学的な出会いである。この出会いこそが、ある意味で実篤がトルストイによって「他人」を知り、メーテルリンクによって「自己」を改めて認識する道を開いたと言える。文学作品を通じた二人との邂逅を契機に、実篤は自己をどこまでも成長させていこうとする思想を土台として、人生を歩みはじめたと言えよう。

1910年に、社会にも文壇にも大きな衝撃を与えた幸徳事件が起こった。当時の天皇制政府は、日露戦争中に『平民新聞』を発行して非戦論をとらえた幸徳秋水を「天皇暗殺を謀議」したとの理由で、当時一定の影響を持ちつつあった社会主義運動に対する弾圧に利用した。そして、この事件は、民主主義者や知識層に大きな動揺を引き起こした。

1911年前後から実篤は、「自己と他人」に関する評論、戯曲、小説などを書きはじめたが、なかでも文壇に注目されたのは「桃色の室」（『白樺』1919・3）である。奥野健男は『日本文学史』（中央公論社 1970・3）で、「桃色の室」が幸徳事件に触発されて書いた戯曲であると指摘し、三好行雄も『日本の近代文学』で「武者小路実篤の戯曲「桃色の室」は、当時の社会主義運動に対する実篤なりの覚悟を語った作品として有名である」と論じている⁽¹⁾。実篤は、この戯曲で自己の分身である「若い男」を「桃色」の生活をしていると擬し、社会主義者を「灰色」の生活をする人々だと喩えている。つまり、有産階級と無産階級の間には共感しあえない溝があるとする考えを示している。同時に、有産階級の生活を享受する自身に対して負い目を感じ、贖罪意識をもちつつも、無産階級に転じることができないことも明言している。

若い男。 俺は自分の特権を捨てるやうなことはしない。天の与へるものを捨てはしない。
(中略)

若い男。 皆な敵にならうとも俺は自我の守護者だ。(全集2巻, 31頁)

「自我の守護」という言葉に注目したい。これは、実篤が自己の「不生産的生活」に後ろめたさを感じつつも、「灰色」の人々を全面的に忌避しきれないという複雑な心情のもとで、「自我を守る」ことが第一義だとする結論に帰着する。この「自我の守護」理論は、彼の思想の砦になり、また彼の生き方の方向を定め批判者と闘う武器にもなった。

当時の文学者は、多かれ少なかれ幸徳事件によって社会主義を敬遠し、文学創作という城に逃げてしまったが、実篤は永井荷風などのように「自嘲」しながら文学の世界に逃げるのではなく、明確な目的をもって人生のすべてをこの「自我の守護」に賭けた。その後、彼はこの思想をさらに明確にし、かつ断固とした姿勢を表明していった。その決意を示すものとして書かれたのが「個人主義の道徳」（『白樺』1911）である。この感想文で作者は、「自分と他人」の関係をテーマに独自の認識を述べている。ここで示した思想は、すでに引用した「自分が他人と合一する」こととは明らかに異なり、それまでの自己犠牲から自己肯定・充実へと軸足が移

っている。その中の関連するくだりを紹介する。

自分は個人主義者である。(中略)自分は自分の個性を他の個性のためにまげようとは思わない。そのかわり自分の個性のために他の個性をまげさせようとしな。 (中略)ここに個人主義の道徳があると思ふ。(中略)自分は生まれつき自我に執着する男である、されば自分は自我を何物の犠牲にしようとは思はない。寧ろ自我の為に何物をも犠牲にしようと思つてゐる。(全集1巻, 346頁)

この引用からは、実篤の思想がすでにトルストイの隣人愛・自己犠牲から脱却し、自己と他人を分離して考えるようになっていくことが明らかである。ただ、「個人主義」を主張する一方、持つべき「道徳」についても、「自分には領土がある、その領土を他人に蹂躪されたくない。そのかわり、他人の領土を自分は蹂躪しようとは思はない」(全集1巻, 346頁)と強調している。筆者は、文中の自らを個人主義者であると明言している箇所注目したい。この極端とも言えるほど自己肯定に拘泥する言葉は、実篤だけのものではない。それは、「今の私に取って総ての前に個性の要求、然る後に個性の建設、然る後に社会の改造がある」⁽²⁾との認識から、個人や個性を最重要視しながら社会の問題を語った有島武郎を除く白樺派の作家たちの特質を代弁したものである。志賀直哉は日記にこう記している。「自分は自分に唯一の道徳以外は道徳といふものを信ずる事は出来ない」⁽³⁾と。また、里見弴は「悪いと知つて居てやることなら、少くとも自分だけにはそれはもう悪いことではないんだ」⁽⁴⁾とさらに赤裸々に示している。ここには、彼らが自分をこそ判断の基準にしていることが明確に示されている。

「個人主義の道徳」で実篤が述べている「自己と他人」の関係は、最初の「自己が他人と合一する」という考えから、「個人主義」へと変わっていったことを明らかにしている。ただし、彼の「自我の為に何物をも犠牲にしようと思つてゐる」という言説が提起する問題の本質を考えなければならぬ。それは、「道徳」をもった自我に対する誠実さであり、本能のままに生きる誓いである。これは簡単そうに見えるが、実は大変困難なことである。なぜなら、自我を確立することは奮励精進の日々を重ねなければ不可能であり、常に孤独のなかで怠惰に傾こうとする自己と闘わなければならないからだ。実篤の目指すところは、徹底した自己の完成であり、単純なエゴイズムではない。これ以降の実篤は、「自己」を尊重すると共に、「他人」をも尊重し、また「自分」をどこまでも成長させるという旗幟を掲げて当時の文壇を勇敢に進んでいった。

1912年に、文壇において実篤と木下杢太郎の有名な「絵画の約束」と呼ばれる論争が行われた。その端緒は、木下が『中央公論』(1911・6)に発表した「画界近事」の『六、山脇信徳氏作品展覧会』に始まる。木下の批評に対して山脇が批判的な考えを表明したが、木下は「山脇信徳君に答ふ」(『白樺』1911・11)を発表し反論する。その反論を原稿段階で読んだ実篤は、自我の尊厳と自己を擁護する目的で「自己の為の芸術」を執筆し論争に参入する。その後の論争は、専ら木下と実篤の間で交わされたが、この時の文章で彼は「自己と他人」の関係について深い認識を示している。

この論争の焦点を説明するために、まず、木下の「無車に與ふ」(『白樺』 1911・12)で主張されている論点を確認したい。

予の眼からは、公衆といふものの内の一人なる同君に、他の公衆からの影響がはたらき、それを同君の気稟とか傾向とかが取り入れ、消化して自分のものにしたのだといふ風に見る。

木下は、自己は他人の影響を受け、他人のものを取り入れることによって初めて自分のものにすることができると主張する。要するに、木下は公衆の影響が大きいと主張している。これに対して、メーテルリンクによって自己に目覚め、他人に冷淡にすべきであり、左右されるべきではないと考えていた実篤は、当然反論しなければならなかった。その時彼は、理論的に「「自己の為」及び其他について—「公衆と予と」を見て奎太郎君に」(『白樺』 1912)で、木下の「自己をなくす」とする論点に反撃した。実篤は次のように述べている。

私はそれから常に「自己の為」ということを頭において行動しております。また自分の行動を一々「自己の為」と云ふことで解釈して見ております。その結果私はここに今迄日本人の知らなかつた、生命へ行く道を見出しました。(全集1巻, 427頁)

この論点を分析すると、実篤の「自己」に対する認識には、日本の従来「忠義」の武士道と異なり、近代的な個性を重視し、人間の本来のすべての欲望を認めるべきだとする主張が強く込められている。つまり、「自己」を尺度に、物事を判断するという思想にたどり着いていたのである。彼は、「自己の為」に括弧を付けている。これは、人間である「自己」が正直に考え、真面目に行動すれば、正しい道からはみ出さないとする自信を持ったことによる強調であろう。敷衍すれば、「自己の為」との理念はそのまま人類の為になるとする確信を持っていたからこそ言い切れたのである。彼は、「自己の為」と「生命への道」との関係について述べている。人間は、自己を一番大事にする動物的な本能を持っていると主張している。本当に自己を生かそうとするなら、無駄なこと、不正なことをせず日々精進してやまないはずであり、そうすれば自ずと生命が生きながらえると自らの実感を含めている。この思想は、彼の理論と行動の最も大きな支柱をなしている。

しかし、実篤の「個人としての欲望と人類としての欲望」などをできるだけ調和させよとの理論は、他人を犠牲にするようなエゴイズムの概念ともまた異なる。ある意味では、実篤の「自己」は他人の立場を認めようとする個人主義であり、西洋的な思想と東洋的な思想とを融合させた独創的な思想とも言える。彼はこのように自己に対する認識を語っている。

自分の経験しない主観については一言も云はないやうに苦心しました。さうしてなるべく主観を広く深くするやうに苦心しました。

(中略)

私は自己と云ふものを最も信用するやうになりました。私にとつては「自己」以上に権威のあるものはありません。

また、実篤は、明確に「自己」についての内容を次のように決めている。

個人としての慾望

人間としての慾望（個人としての慾望と区別する為に私はよく人類としての慾望、或は人類の血と云つてゐるもの）

動物としての慾望

地球としての慾望

物如としての慾望、等、

（中略）

私の申す自己の為に働けと申すのは之等の欲望を出来るだけ調和させ、その調和されたる欲望を出来るだけ満たせと云ふことになるのです。このことは元より容易なことではありません、しかし不可能な事ではありません。（全集1巻、428～429頁）

実篤が語った「自己」は、この五つの欲望に示されているように、社会及び人類すべてのものとつながって一体化している。この「自己」とすべての「欲望」との関係を、巧みに調和させ充実させることこそが、彼の義務であり使命であると認識していた。彼は、人類の発展に適合する奥深い理論を悟ったからこそ、声を大にして「自己の為に働け」と世人に宣言できたのである。結局、論争は、木下の言った事物に対する客観性や広さなどを強調すべきとする考えと食い違い、自己と他人との関係に対する認識をめぐって展開していく。論争そのものは、次第に焦点から外れてしまったが、自己の人生観、思想の発展過程を論述するものとして充分注目に値する。実篤が強調した「自己」は、決して狭小なエゴイズムの「自己」ではなく、人間肯定、人類尊重に通じる大きく深い「自己」である。「生命へ行く道」という言葉は最も適切に彼の思想を表している。米山禎一は次のように実篤の思想を評したことがある。

ここの「自己の為」は一見利己主義にも受けとられるが、そうではなく、自然から与えられた、自己のあらゆる方面の欲望を満足させることによってこそ、最大の貢献を人類社会のために果たせると考えているのであり、人間、人類への愛が基調になっているということである。⁽⁵⁾

実篤が、個人の生存の意義を人類の生存の意義と同様に大事であると主張するこの高邁な理論は、究極的に言うなら、人類生存の意義の終極的な目的として個々人における「自己」の欲望を満足させるところにあると解すべきではないか。

作者がこの論争に力を注いだのは27歳の時で、正に思想形成期に当たり、18歳でトルストイを知ってから、10年の歳月が経っていた。実篤は、この10年間で「自我の尊厳」に対して身を挺して山脇と木下との論争に介入し、自らの思想を主張する人間に成長していた。繰り返し述べるが、実篤が唱えた「自己」は、西洋的、近代的な個性を尊重するもので、小市民の個人主義との間に一線を画している。すなわち、〈自己の為は万物の欲望である〉という認識を土台としたものであると言えるであろう。それはまた、本人が確固たる信念をもっているからこそ、他人の論争に割り込むことができたのである。この時期から、実篤の自己の充実、自我の拡充

を主張する思想が明確に形をなしていった。その直後に発表した作品『わしも知らない』（洛陽堂 1914）、『彼が三十の時』（洛陽堂 1915）などにおいては、作者の「自我の尊重」の思想がさらに鮮明に表現されている。

実篤は、この思想的な新しい到達によって、1918年には理論の範囲にとどまるだけでは満足できないことに気がつく。実篤は、思想的なバックボーンが確立されるにしたがって、「自己と他人」を調和させようとする実践の場として「新しき村」を創設する。同志たちとのこの行動は、18歳で学んだトルストイの「隣人愛」の理想主義から受けた影響と、メーテルリンクの「自己愛」とを融合したうえに、実篤独自の「自己を最大限に生かす」と「他人をも生かす」という思想を、いわば攪拌し醸成して生まれた実践ではないか。

「新しき村」の基本精神は、人間としての自由の尊重をベースに他人を侵さず、他人より侵されず、「自己を生かす」と共に「他人をも生かす」という人間関係を厳格に規定している。実篤は、この「共生共存」の関係こそが自他調和の最も適合する道であると確信した。「新しき村」の実践は、真の目的を、農業を営むより「自己の救済と他人の救済を同時に行おうとする」ところにおいていた。それは、農業を中心としない考えに基づき、「新しき村」に農業専門家を置かずに、むしろ芝居や読書などを熱心に行っていたことから充分に窺える。この時期の生き方、考え方や生命観などについて書かれた空想小説『第三の隠者の運命』（曠野社 1921）を、彼の「自他」という課題に深く触れた作品として挙げたい。

作者が36歳となった時の作品『第三の隠者の運命』は、実在してほしいと願う想像の世界を描いた小説である。1921年は、「新しき村」を創立してから4年目に入った時期で、実篤がこの「村」をどうすれば人類の理想郷として実現し確立できるのかをこの小説で模索している。骨組みは、「新しき村」の現実と将来を想定する縦線と、キリストの求道精神を取り入れた横線に、主人公の自分と櫻子との恋愛を交えて構成されている。内容は、第三の隠者である主人公自分の体験を通して、人と人との友情、闘争、男女の愛情と嫉妬、集団との権力をめぐる闘いなどを描写したスケールの大きい世界が展開されている。「その軍勢は勢ひにのつてなほ秩序がなく、田畑を荒し、人家を焼き、奪へるものは残らず奪ひ、そして女人はかすめゆくと云ふのだつた」（全集4巻、533頁）。このくだりは、流血の戦いになりそうな危険な状態を描いているが、しかし、その敵の将軍は主人公の叔父であるという単純な理由で戦いが避けられ、真実味のある解決法とは言い難い。ただ、流血の事件にまで発展させたくないという作者の思惑と、あるいは流血の場面描写が困難な作者の限界の両方を感じる。

作者は、この長編小説に「新しき村」で必ずぶつかる「自己と他人」の関係を、具体的な日常生活の中に溶けこませ、実例を想定しながら解決しようとする描写に筆墨を多く費やしている。次に「自己と他人」が、和気藹々に調和された情景の描写を引用する。

すべての人は皆一致して見えた。そして人々はAを信じて、自分達は泰平を楽しみ、働く時以外は皆、呑気に遊びまはつてゐた。（中略）万事は例の通りに、しかしよりよく進んで行つた。農作物、工場の仕事、皆順調で進んでゐるやうであつた。自分は自分に与へ

られた自由をたのしみ、そして時々人々の仕事をたすけた。(全集4巻, 533頁)

この引用から判るように、人間と人間は互いに信じ合っていれば、すべての事が順調に推移し、生活も豊かになり、楽しくなるに違いないという作者の思いが込められている。要するにこの小説では、作者がこれまで体験してきた労働の楽しさと、それに相反する快樂からの誘惑、一人の女性を愛する純粋な気持と多数の美しい女性と交際したいという人間的な欲求の問題、裏切り者に対して殺すべきか救うべきかという人道的問題、意見の異なる人と別れるべきか調和すべきかの葛藤、死の問題などについて感じたままに提起している。殺人の罪を犯した人に対して、作者は次のように述べている。

「死刑, 死刑」と云ふ声が高くなつた。

(中略)

「人間の生命を私達は尊敬ませう。どんな人間の生命でも地上に生まれた人間の生命は尊敬しやう、それがあなた達の尊敬すべき祖父母の方の考ではなかつたのですか。(中略) 少くも殺してはならないものだと云ふことを我々は現在の人、及び将来の人に知らせたいものです。それは今あなた達が想像するよりも遥かに大きな、よろこびの多い仕事です」。(全集4巻, 531頁)

結局、殺人の罪を犯したXという男が死刑から赦されたが、Xは自分が「大罪人である」と悔悟し、自責の念に耐えられずに自殺した。事件があれこれと起り、さまざまな解決の方法が展開されているところに、作者の思想が全面的に展開されているかの観がある。

しかし、現実はやまやさしくはない。「新しき村」は、実篤が理想とした〈利益を一切追求しない、兄弟愛に満ち溢れる〉理想郷に向かって順調には発展できなかった。村に集まってきた人々たちには、個としてのそれぞれ異なる考えがあり、内紛のような事件が度々起こった。実篤自身も、妻の浮気によって夫婦関係が破綻する。三角関係とも言うべき女性問題から、離婚、再婚を体験し、最後は、母の病状も気掛かりになったことも重なり、そもその指導者である実篤本人が村から離れ、「村外会員」になってしまう。実篤は、一連の体験によって傷つき、絶対的な「自己と他人は調和できる」とする思想から、「自己と他人は調和しにくい」という考えに傾いていった。その考えが鮮明に現れているのは、代表作である『愛慾』などである。次にその『愛慾』を分析したい。

『愛慾』は、1926年1月に『改造』に発表された戯曲である。発表、上演した当時は、新劇史上の話題作、問題作として心理劇における評判を得たが、それまでの、『ある青年の夢』、『友情』、『第三の隠者の運命』などの作品と比べると、主題設定、創作手法など全く異なっている。

登場人物は、役者の兄信一とせむしの弟英次および弟の嫁千代子三人と、そして友人の小野寺夫婦という五人だけである。三人の関係は、兄は弟のために自分の女を紹介し、弟はその女と結婚する。しかし、弟の嫁は、兄に惹かれて弟から逃げようとする。結局、弟が自分の嫁を殺してしまうという残酷で複雑な心の動きの過程を内容として作品が構成されている。このような設定をした作者の狙いは、自己の欲望のために他人を犠牲にするか、それとも他人のため

に自己の欲望を殺すのかという心理的葛藤の基本的な対立を描出するためである。作者は、最初是对立する三人の関係をできるだけ調和させようと描いていたが、人間の欲望、とくに愛に対する独占欲は簡単に抑えられないとする方向へ展開させ、英次の矛盾する心情、つまり自分か嫁を殺さざるをえないという葛藤をリアルに描写している。

千代子。 それでは之からおいとまします。お身体を大事にしてください。

(千代子、静かに退場しやうとする。その後ろ姿を憎悪の目で見おくつてゐた英次はとうとう辛抱が出来ずにとびかかる。気違ひのやうに、なぐる。千代子も遂に抵抗する。その内に発狂したやうになり英次千代子の首をしめる。千代子死んでしまう。(中略)

英次。(低い声で) お前は不幸な、不幸な女だつた。俺はどんなにお前を幸福にしてやりたかつたか。だが俺には他にどうすることも出来なかつた。(全集6巻、168頁)

結局、英次が最初は「辛抱」しようとしたが、自分の感情を理性で抑えられなくなって、千代子を殺してしまうという残酷な結果になった。

作者は、この作品で「自他相克」という重い問題を提起している。つまり、「自己」のために「他人」を犠牲にするという人間性の喪失を描いたように見える。作者は、自らの苦い経験をもとに、この避けて通れない人間の業を認めることなしには真の人間を語るができないと認識したのであろうか。

この『愛慾』は、それまでの作者の専売特許とも言える楽天性に満ちた作品と異なり、人間のみが持つ心理の深層に焦点をあてた重い陰湿な内容になっている。それまでの、明るく気高い『友情』や、ユーモアと希望に満ちた『人間万歳』などと比べて、百八十度の転換を示している。筆者は、彼がなぜこのような作品を書かなければならなかったのかと理解に苦しむ。はたして自己を信じ、他人を救う考えを維持し理想を糧としつづけてきた作者に、この作品に限って私欲の為に相手を殺すまでに至る残酷な人間を書かざるを得ない何かがあったのであろうか。

ここで、『愛慾』を発表するに至る作者の心情の変転と、それをもたらした契機と動機が何であるかについて述べたい。まず、先に述べた「新しき村」の経営不振が、当時壮年期にあたる実篤に精神的な打撃を与えたと思える。永見七郎の『新しき村五十年』(1968)によると、村人の不和が深刻になった時、実篤がみんなに沈痛な表情で「私はもうお前たちを信用しない⁽⁶⁾」と言ったことがある。同じ志をもって集まった仲間に裏切られ、心に傷を残したまま離村した実篤は、その頃から無条件の人間信頼から不信へ、そして懐疑へと変わっていった。妻房子との離婚についても、社会から非難を受け、充分に弁解することもできなかった。これらの事実は、実篤が理想と現実、愛情の独占という相克問題を調和できず、人間は欲望の奴隷になりやすいことを痛烈に知らされたのではないか。筆者は、実篤の「新しき村」を経営する現実的困難と、離婚から再婚への心の遍歴がこれまでの作品と異なり、悲観すべき現実を表現す

る異質とも言える『愛慾』に自己の心情を投影したのではないかと考える。

他の一つとしては、社会状況の変化にも原因があるのではないかとと思われる。1923（大正12）年に起きた関東大震災によって元園町（出身地）が全焼し、東京が瓦礫と化した。このような時期に、いくら楽観主義者の実篤であっても、同志たちとの不和と自然災害などの打撃を受け、悲観主義的傾向に落ち込んだのも無理からぬところと推察できる。

しかし、これまで強く自己を信じ、他人を尊重する理論を主張してきた作者が、簡単に反対の立場に変わってしまうものであろうか。この疑問を解くために繰り返し作品を読んだ筆者は、作者が如何に現実の厳しさ残酷さを書いて最終的には人間への信頼を失わなかったという確固とした姿勢を発見した。戯曲の最後で、英次が妻を殺し、自分も気絶した後、友人が登場して来た時のせりふを次に引用する。

英次。 君は知ったのか。
(小野寺、合点してみせる)

英次。 それで君は僕をすてないのか。

小野寺。 ますます捨てない。
(二人顔を見あわせる)

英次。 ありがとう。
(英次が泣きだす)

— 幕 —（全集 6 巻，176 頁）

この最後の対話が、舞台上演される場面を想像しただけで、涙を抑えられないほど感動的なラストシーンになるのではないか。『愛慾』は、内容の上では残酷で暗いものであるが、最後に人間への希望と救いという人道上の素晴らしさを余韻として残したところに、戯曲として成功した理由がある。言うまでもなく、これは実篤の一貫した思想と変わらない主題でもある。『愛慾』は、実篤の創作の全過程においてきわめて異彩を放った戯曲ではあるが、英次が人間不信に陥って殺人を犯したものの、彼の心を救いたいという考え方が作品の重要なポイントになっている。英次という人物を通して、作者はさまざまな挫折を味わった「自己」を救いたかったのであろうか。はたまた、自分と意見が異なる「他人」を助けたかったのか、若しくは両者とも救いたかったのだろうか。この最後の、意味深長なワンシーンからも戯曲家と言われた実篤の技量が十分に窺える。当時、心理劇として評判になったこの戯曲は、鋭く「自他の葛藤」を描出した傑作であると言える。

それでは、この時期において作者が「自己と他人」との調和を信頼することができなくなり、人間の本能が理性を圧倒する場合には葛藤や対立が避けられないとする問題提起をしていることを考えてみたい。

この戯曲は、作者が作家として20年近く経験を積んだ後に書いたものである。作家としての蓄積もあり、体験した人間のさまざまな業について書きたいとする作者の思いは判らなくもない。実篤は、その思いに突き動かされたのか、それまで一度も書いたことのない人を殺す主人

公を書いたのである。根から人道主義の思想に染められた作者は、兄信一と友人小野寺の深い愛を通して、英次を感涙にむせぶ人間として描き、反省させる。そして、「自他相剋」について問題提起し、その相克を認めた上にさらに乗り越えるストーリーは、やはり実篤でなければ書けないものであろう。

二 魯迅の「犠牲論」

魯迅の一生には、生や生命を尊重し、社会的弱者や貧困階層への共感、旧い因習や制度を打ち破り、新時代への接近に力を尽くしたいとする本質において変化はほとんどない。自身の少年時代における経済的苦労は、貧困という現実を他人ごとと思うことができない共感を身につけ、社会変革の必要性を自身の内的欲求に根ざすものと認識させたが、魯迅自身は「人道主義と個人主義」（全集13巻、108頁）を両方持っていると言っている。強いて言えば、進化論から現実主義、批判主義へと進んだ形跡はあるが、近代思想としてはニーチェ哲学に近いともいえる。しかし、そのような内面的変化は彼の作品に顕著に現れてはいない。「自己と他人」の関係については、実篤と異なり「自己と他人を生かす」という明確な概念はなかった。魯迅は、むしろ自分が他人の礎になるという考えを根底に持っている。本人自らが旧社会に育った人間ということもあり、社会制度の矛盾、旧思想の弊害などを熟知していることを自負し、批判する役割に適していると解釈している。つまり、自身は新社会の主人公になるのではなく、あくまでも若者の成長のために手助けをする考えが大きなウエートを占めていた。ここでは、魯迅の自己犠牲の思想が作品にどのように示されているのかを明らかにしたい。

1919年前後の中国では、辛亥革命の進行と失敗、「五四」運動などが民衆の自覚を促すうえで大きな役割を果たした。日本では、白樺派の柳宗悦が朝鮮における「三・一独立運動」に関する日本政府の対応を新聞紙上で批判するなどの動きがあったが、当時の中国文壇では混沌とした社会情勢と同様に新思想を主張する者もいれば、旧思想を守ろうとする者もいた。魯迅は1902年から1909年までの日本留学では、西洋の進化論、民主主義など進歩的な影響を受け、積極的に吸収し、「個性の価値」の重視、個人の尊重など先進的な思想に開眼する。

魯迅は、小説を書くことと平行して大量の評論と雑感文もしたためている。中でも子供への愛や期待に関するものが多いが、とくに「我々はいまいかにして父親となるか」（『新青年』1919・11）を考察する。

子供を育てるうえでは、教育的な役割からみても、人間関係という枠組みのなかで最も重要な存在は親である。この文章の主旨は、家庭の柱として頼られている父親に対する呼び掛けにある。魯迅は、愛に係わって「子供のためにだけ言っても、およそ自分を愛さぬ人は、実は父親としての資格に欠けると言ってよい」（全集1巻、191頁）と語っている。魯迅は、中国社会を支えている各家庭の教育問題がとりわけ重要であるとの見解のもと、自身を含む年輩者は若い人々の成長のために喜んで犠牲になるべきであると主張し、儒教思想に無批判に従う盲目的孝・礼の思想を覆そうとした。この文章で繰り返し訴えている言葉は次の通りである。

自分が因襲の重荷を背負い、肩で暗黒の水門を押し上げて、彼らを広く明るい場所に解き放ってやる、これからは人間らしく幸せに日をおくれるように。(中略) まえの生命は、あとの生命の犠牲になるべきなのである。(中略) 無私の愛でもって自分は後生の犠牲にならなければならぬ。(中略) 人類には、他人のために自分を犠牲にしようとする精神があるものだ。(中略) 目覚めた父母は完全に義務を遂行し、利他的、犠牲的でなくてならぬ。(全集1巻, 185～189頁)

魯迅は、子供の自由な成長を保障するために、大人が犠牲になることが人類の発展のために必要不可欠なものだと考えている。当時の中国の民衆は、孝・礼の思想に縛られ、子供を私有物のように扱い、その意志を尊重しなかった。魯迅は、子供たちの健全な成長を妨げている当時の中国社会とそれを支えている家長思想を批判し、〈根本的な方法は、社会を改良する以外にない〉との考えを示している。そして、このような思想による呪縛と親子の関係が社会の進歩を妨げ、新しい思想、道徳を受け入れる可能性を制限している現実を重要視していた。前記の文章を書いた二日後、魯迅は有島武郎の「小さき者へ」(『新青年』1919・11)を翻訳し感想文を書いた。魯迅は、感想文で有島を「覚醒者」と称える一方、彼の「思いつめた悲しみの調子が漂っている」(全集1巻, 445頁)ことも指摘している。しかし、最後には有島の愛の深さ、愛とその未来に対する期待への共鳴を自身の期待も込めてこう結論づけている。「ただ、愛だけは依然として存在する——一切の小さき者に対する愛だけが」(全集1巻, 445頁)と。この一文は、「狂人日記」の最後にある「子供を救え」という命題に一脈通ずる。

この時期に魯迅は、同様の主旨の文章を集中的に書いている。「随感録四十九」(『新青年』1919・2)において、さらに具体的に犠牲的な行為について説明している。

老いる者は道をあけてやり、うながしつつ、はげましつつ、若者を進んで行かせる。途中に深淵があれば、その死でこれを埋め、彼らを進んで行かせる。(全集1巻, 420頁)

これは、実行したいなら誰でもできること、つまり、献身的な精神の大切さを説いている。魯迅は、死の覚悟をもって若者の成長を助けなければならないと考えていた。彼は、この徹底した自己犠牲の精神をもっていただけからこそ、「食人」の社会を破壊し、すべての旧思想、旧道徳を改革できると信じていたのである。この作品を通して推測すれば、彼はこの信念を民衆の中に植え付けたかったのであろう。

前述の文章の他に、「随感録四十」(『新青年』1919・1)、「随感録四十一」(『新青年』1919・1)、「硬訳と文学の階級性」(『萌芽月刊』1930・3)なども同様の主張を述べている。魯迅は、さまざまな文章に自己の犠牲論を語っており、その数は枚挙にいとまがない。

以上、魯迅の犠牲論が示されている評論を考察した。次に『故事新編』に収められた小説「補天」の分析を通してその真情を探ってみたい。

「補天」は、1922年に『晨报四周記念増刊』12月号に発表された小説である。人類を創った神話から題材をえて、主人公女媧を描いた作品の構成は、三つの段落に分けられているが、女媧の働く姿を中心に描写するプロットになっている。最初の段落では、女媧が「水を含んだ泥

を手に掬うと同時に何度か捏ねまわした。すると、自分と似たような小さなものが両手の間にできた」。これは女媧が人間を創った瞬間についての描写である。この後、我が身を忘れて懸命に働く女媧と、そのために、過労にさいなまれた女媧に対して同情をこめた筆致で物語を進めていく。

彼女は久しい歓喜の中で、すでに困憊していた。ほとんど息を吐き尽くし、汗を流し尽くし、頭さえくらくらして、朦朧と目はかすみ、(中略)手だけは休めず、うわのそらで作りに作った。(全集3巻, 216~217頁)

女媧が、たった一人で黙々と「捏ねまわ」す行為について、その描写は数行ではあるが、作者の真情が溢れている。そしてそれは作者自身が、献身ぶりに感動しなければ、目の前で見ているような雰囲気や臨場感は行間からは生まれにくい。

第二段では、「天に、深く広い大亀裂が走っていた」のを見て、「繕わなければ」と思う女媧の勇姿が描かれるが、疲れ切った女媧にはこれまで以上の困難が待ち受けている。

それいらい、連日連夜、蘆を積みあげ、たきぎの山の高くなるだけ彼女は痩せていった。(全集3巻, 221頁)

おそらく意志の弱い人間なら、ここで中止してしまうであろう。あるいは、自分の健康を配慮し、時間をかけて「繕」い、痩せこけてしまうまで我が身を削って打ち込む必要はないと思うだろう。おまけに、自分の手で造った人間たちは、天を繕う材料を使わせないだけでなく、裸の女媧を嘲笑している。しかし、女媧が、人間のエゴに呆れながらも意に介せず、天を「繕」うことに全身全霊をあげた結果、天は「繕」われる。しかし、

自分で自分のすべてを使い果たした彼女の体軀は、今その中間に横たわり、そして二度と呼吸をしなかった。(全集3巻, 224頁)

となる。人間を創り、天を「繕」った女媧は死んでしまうが、誰一人慰め、理解してくれる人はいなかった。作者は、深い同情と深甚な敬意をもって、女媧の献身ぶりをいきいきと描いている。女媧は、伝説上の人物である。科学を学び、唯物論的傾向を持つ魯迅は、実在の人物ではないと知っているはずである。あえて女媧を人類の創始者として称える理由は、女媧の献身的な精神を評価し、人類の発展にとって犠牲的な精神の必要性を主張しているところにあるのではないか。

作者は、人類のために犠牲になった女媧を称えた後に、第三段落では仙山と不死薬を探す伝説に筆を転じる。ここでは、自らの犠牲をいともわかない女媧の対極に位置する存在として、ひたすら生を永らえたいとする秦始皇や漢の武帝の愚行を「方士は仙山を探しあてられず、秦始皇は結局死んでしまった」(全集3巻, 225頁)と批判している。魯迅には、神話伝説を活用しつつ自己の主張を訴える作品が多い。「補天」は、生命の起源を説き、女媧のような犠牲者があったからこそ、今日まで生命が発展してきたという道理を説いている。犠牲的精神をもって行動する人は、人類の記憶に残り称賛される。自己中心的に振舞う人は、唾棄されるべき存在となってしまう。まさに、女媧と秦始皇を並べて描いた作者の意図は明白であり、眼光紙背に

徹する説得力がある。

魯迅は、女媧の精神を自らの課題として受け継ぐにとどまらず、民衆に呼び掛けていたのではなかろうか。民衆の多くが、神話伝説を信じていることを認識し、民衆の理解と関心のレベルに合わせて作品を創る作者のセンスと視点に敬服する。

若者を愛し、自己犠牲を積極的に受け止める魯迅にとって、若者の死は最も耐え難いことだった。その事実を示すように、若者を哀悼する文章が多く残されている。魯迅がどのようにその悲痛な気持を表したのか見てみたい。「花なき薔薇」(『語絲』 1926・3)、「劉和珍君を記念する」(『語絲』 1926・4)、「忘れんがための記念」(『現代』 1933・4)などがそれである。「忘れんがための記念」から引用してみる。

青年が、老いたる人間の為めに記念の文章を書くのではない。この三十年間、わたしは多くの青年の血がいく重にも血溜まりをつくったのを見てきた。それはわたしを埋め、わたしは呼吸できない。土泥のなかから小さな孔をうがち、口をのぼして死にぎわの息をつくかわりに、このような筆墨をもってわずかばかり文章を書いている。これは、どのような世界であるか(全集6巻, 320頁)。

この叙述には、行間から深い哀惜の情が滲み出ている。「呼吸できない」ために忘れたいとする反語には、作者の哀切な心情が込められ、作者が他者一若者と渾然一体となっていることを裏付けている。このような気持から生まれた文章であるがゆえに、言葉もまた修飾や気取りとは無縁なものとなっている。まさに、若者に中国の未来を託した魯迅自身の思いが込められ、諸々の作品にもこの姿勢が一貫している。進化論の影響を受けて以来、魯迅は若い世代のために何らかの役割を果たすことこそ社会に役立つと考えていた。「呼吸できない」という内面からの呻きは、「若者」と切っても切れない関係にあるからこそ発せられたのである。

魯迅の犠牲論の精神を確認できるもう一つの形がある。魯迅は、自分の考えを文章に表すばかりでなく、自ら実行もしている。彼は生涯において、多数の雑誌を作った。それは若い文学者を育てる目的のための行動であり、寝食を忘れるくらい懸命だったと指摘されている。郁達夫が、「回憶魯迅」(魯迅を回想する 筆者訳)で魯迅と雑誌を編集した時のさまざまなことを書いたが、同時代の文人として残した貴重な資料の一つである。その中から次のように引用する。

説到了実務、我又不得不想起我和他合編的那一個雜誌《奔流》一名義上、雖則是我和他合編的刊物、但闕迂校對、集稿、算發稿費等瑣碎的事務、完全是魯迅一個人効的勞⁽⁷⁾(実務といえ、私たちがあの『奔流』という雑誌を共同で編集したことを思い出さずにはいられない。名義上、私と彼と一緒に編集することになっているが、しかし、校正、原稿集め、原稿料の計算など諸々の雑務はすべて魯迅一人で担当し働いたのである。 筆者訳)。

これは、魯迅について尊敬する理由を述べた友人の証言である。驚いたことに、数多くの回想文は、その大半が魯迅の献身的な精神に基づく、実務を厭わない事実に触れている。李霽野は、「憶魯迅先生」(魯迅先生を回想する 筆者訳)で、高长虹の原稿を校正するために血を吐

いたと記している。魯迅の偉大さは、作品の内容にとどまらず、文学の確立と若者の養成のために自らを惜しむことなく総ての力を傾けたところにあった。

魯迅は、その他にも、友人・若い文学者のために「序」を数多く書いている。新人の作品出版に対する尽力についても、異口同音に称えられている。とりわけ、上海に移って以降も、体力の衰えていくなかで友人を紹介するための執筆をやめなかったことからその懸命さが伝わってくる。

彼は、「白莽『嬰兒の塔』序」（『文学叢報』 1936・4）で次のように説明している。

もし、その人に友情がまだあるならば、亡友の遺文を所持していることは、火の玉を握っているようなもので、夜もおちおち眠れない気がして、氏の普及を試みるであろう。
（全集 8 巻，553頁）

「遺文」は、友人の生きた精神生活の証である。その精神の「普及」を自ら任務とするなど、ここにも損得を考えない作者の姿勢が見える。

彼はまた、「半農のため『何典』に題せし後に作る」（『語絲』 1926・6）でも同様な文言を綴っている。

数人の友人のことが気にかかり、そして自分の相変わらぬ無力を感じている。（中略）
とにかく仕事を一つ片づけた。私は今の別な心情をも書き、かつ発表して、『何典』の広告とする（全集 4 巻，344頁）。

統計によると、1918年から1936年までの18年の間に、魯迅の指導を受けた青年は約五百人にのぼる。他人の作品のために、序、跋を書き、校正後に出版した作品は、110種類以上にのぼる。彼は、貧乏な若者に物心両面の援助を惜しまなかった。葉紫、葦素園、蕭軍、蕭紅などの文壇への登場は、いずれも魯迅の尽力によって実現されている。魯迅は、自分を次の世代への継承のために存在する「中間の人間」という明確な認識を持ち、他者を育成することを仕事の一部だと考えていた。彼は、『近代世界短篇小説集（一）』小引（1929・4）でこう語っている。

一輪の花でも咲かせることができるなら、いずれは朽ちる腐草となったとしても、まあ悪くはあるまいという思いがないわけではない。（中略）わたしたち一訳者は、みんな勉強しながら、この仕事を試みた。（全集 5 巻，328頁）

ここでは翻訳のことを言っているが、魯迅は「花」を育てるには「腐草」が必要とのたとえで、人間として当然だと考えている。魯迅は、「希望」（『語絲』 1925・1）で自己と若者との関係についてこのように示している。

わたしはあの過ぎ去った悲しくあてどない青春をさがしだすことにしよう。それがわたしの身外にあるとしてもかまわない。身外の青春が消えれば、わたしの身中の晩年もたちまちしぼむのだから。（全集 3 巻，31頁）

この「身外の青春」は、若者のことを指している。若者のために役立つことができれば、それは必ず社会的な貢献につながると考えている。逆に、若者に役立つことができなくなれば、

自分の生きがいもなくなってしまうとまで思いこんでいるところに切なさがある。この一文は、魯迅の若者に対する思いを象徴的に語ったものと見られるが、ここにも次の世代との絆がなければ、魯迅文学が成り立たないという彼自身の生き方が示されている。

三 結論

述べてきたように、実篤の個人主義、「自己と他人を生かす」思想と魯迅の「犠牲論」との間に、大きな隔りがある。実篤の場合では、「自己」を生かすことが「他人」を生かす前提であり、「自己の為」の結果は「他人の為」にもなるという確信と使命感をもっていただことにほかならない。要するに、実篤は若い時から「自己」を生かすことが「他人」を生かすことと調和するような、広く深い人類の理想を求め、生涯を通して実現させようと努力した作家であり思想家でもある。実篤が自分の理想に自信をもったのは、「自己」にせよ、「他人」にせよ、いずれも自然にこのように形成されたことを不動の原理と信じて寸分も疑わなかったからである。このまぎれもない独創的な理念は、実篤のすべての活動の中に貫かれており、〈自他を生かすことは同時に社会のためになる〉とする実篤独特の人生観を形成したのではなからうか。

魯迅は実篤と違って、「自己」を強調する考えを持っていなかった。他者の作品を出版し翻訳することは、自己の創作に専念するより多くの時間を必要とする。創作のための自分の時間を犠牲にすることも厭わない努力は、誰にでもできるものではない。その点では、単純ではないものの魯迅が進化論から学んだ生き方に関連するとはいえないだろうか。魯迅は長編小説を一篇も書いていない。そして後期には、短篇小説もほとんど書かなくなった。その原因はさまざま考えられるが、その主要な原因の一つは魯迅自身も言うように「不滅の文章」を後世に残そうとしなかったためであろう。作家としては、現実社会と人間の「欠陥」を批判するかたわら、文学に従事する若者の育成を自らの使命だと認識していた。彼のすべての作品は、表では「自己」を無くしたように見えるが、結果的には、自己の思いを語る形になり、他人に深く関わったのである。丸尾常喜がこのように魯迅を評している。

魯迅の一生を考える場合、予想されるいくつかの視点のなかで、私は、一個の過渡的な中間物であることを、その運命として引き受けた一人の人間が、生命の一回性をどのように生き抜いたか、ということを中心に考えてみたいと思うのである。⁽⁹⁾

中間物だからこそ、前後の世代とのつながりが必要不可欠である。実篤の言葉を借りて言うと、「自己を生かす」という認識がなく、「他人を生かす」生き方に徹したものである。しかし、その違いを深く掘り下げてみると、両者は他人と密接に関わった点で共通し、いわば他者との関わりによる自己確認の行為、アイデンティティに関わると解してよい。魯迅の生涯を展望する場合、彼は若い世代のために尽力した結果、自己をもきわめて有効に生かすことに成功した。実篤の「自己と他人を生かす」思想と魯迅の「犠牲論」は、両者にとってそれぞれ文学の重要な使命を果たす点で最適な方法だったのかもしれない。生き方がさまざまあるように、文学に対する理解、表現も十人十色であることは当然であろう。

文学が、その根底に人間・社会への強い関心を置いていなければならないものだとすれば、実篤と魯迅はこの二つの面において、生涯関心を持ち続けた文学者である。かつ、どちらにより重きを置いているかと問われれば、実篤の方は個人あるいは人間への思索を重要視し、魯迅は社会全体への危機感が強かったと答えるべきである。この違いは、両者の作品の幅、深さ、内容にも明らかに反映されている。両者の相違は、単に文学上の問題にとどまらず、日本と中国との「近代」への発展の経過の違いとその時代の文化・文芸に対する認識と理解の違いから生じたものでもあろう。

(注)

- (1) 三好行雄『日本の近代文学』49頁 塙書房 1972・7
- (2) 有島武郎「自己の要求」『改造』1921・1
- (3) 志賀直哉の日記 1910・4・22
- (4) 里見弴「君と私」『白樺』1913年4, 5, 6, 7月に連載。
- (5) 米山禎一『武者小路実篤—日本の超越主義者—』126頁 大新書局 1987
- (6) 長見七郎『新しき村五十年』23 財団法人新しき村 1968
- (7) 郁達夫「回憶魯迅」『民族英雄—名人筆下の魯迅 魯迅筆下の名人』112頁 東方出版中心 1998・1
- (8) 李霽野「憶魯迅先生」『民族英雄—名人筆下の魯迅 魯迅筆下の名人』80頁 東方出版中心 1998・1
- (9) 丸尾常喜『中国の人と思想⑫ 魯迅』6頁 集英社 1985・5

文中に引用した武者小路実篤の文章は小学館版全集（1989）に拠り、魯迅の文章は学習研究社版全集（1984）に拠った。